



2026（令和8）年3月23日発行
（編集）愛光本部
（TEL）043-484-6391
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

新年の活気を力に変え、日々の支援や環境を丁寧に見つめ直す充実した時間が流れています。組織の内側から質を高めるための学びを深めるとともに、次年度という新しいステージへ向けて、着実に歩みを進めております。

地域との交流においても、対話を通じて手を取り合って歩む大切さを改めて実感しております。時に困難な状況に直面することもあります。その都度、組織の結束を深め、より開かれた信頼される法人でありたいという想いを強くしております。

□事業経過など（2026.2.1～）

3	火	業務執行会議
12	金	コ・ヒューマントレーニング
13	水	5S 研修
17	土	佐倉圏域事業部実績会議
18	日	地域食堂ともいき/褥瘡ケア研修
19	月	メンティー交流会/本部実績会議
20	水	財務プロジェクト
24	木	経営戦略会議/人事ワーキング会議
25	金	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議
26	月	業務執行会議
27	水	業務執行会議/高齢者福祉事業部実績会議

■月報から

□ 職員数400名突破!! (本部)

先月、法人職員数がついに400名の大台を超えた。退職者等により現在は300名台となっているが、これは愛光の歴史の1ページである。

20年前には249名、10年前は364名であった。この職員数の推移は、地域社会と共に歩み、発展し続ける「愛光」の軌跡を示している。

近年、労働人口の減少や採用難といった厳しいニュースを耳にすることも少なくない。そのような状況の中、70周年という大きな節目を超え、こうして新しい仲間を数多く迎えることができていることは、今後のさらなる発展に向け大きな弾みとなる。

(総務課長 宮本 典昭)

□ 「非がんの緩和ケア」セミナー 看取り事例をオンデマンドで発表

(リホープ)

医療と福祉の連携は重要な課題であるが、とりわけ障害福祉分野においては連携の難しさが指摘されている。1月に千葉県知的協主催の自立支援セミナーでも「看取り」をテーマとした発表が行われたが、そこでは医療連携の難しさや現場の課題を中心に語られていた。

一方、厚生労働省の「障害者の地域生活支援も踏まえた障害者支援施設の在り方に係る検討会」においても、障害者支援施設における看取りや高齢障害者支援の在り方が議論されている。障害のある方が高齢期を迎える中で、看取りやACP（アドバンス・ケア・プランニング／人生会議）の取り組みは今後ますます重要になると考えられる。

こうした状況を踏まえ、今回、医療関係者や介護支援専門員等が参加する「非がんの緩和ケア」をテーマにした研修において、当施設でのM氏の看取り事例についてオンデマンド形式で発表する機会を得た。障害者支援施設における看取りの実践や、本人・家族・職員がどのように関わりながら最期の時間を支えてきたのかを紹介することは、医療関係者に現場の実情を知ってもらう機会となった。

障害者支援施設における看取りの実践はまだ十分に知られているとは言えず、医療と福祉の相互理解を深めることが今後の連携には不可欠である。今回の発表を通じて、障害福祉の現場で行われている支援や課題について理解を深めてもらう契機になればと考えている。

今後もこのような機会があれば積極的に参加・発表を行い、医療関係者との関係構築を進めるとともに、障害者支援施設における看取りやACPの実践について発信していく所存である。

(リホープ副施設長 麻生 知明)

□ 酒々井パーキングエリアの i-koubow の広告が完成! (根郷通所センター)

酒々井パーキングエリアの店頭掲示物が完成した。本掲示物には、私たちの福祉法人の名称と、法人の詳細情報にアクセスできるQRコードを掲載している。さらに、日々の作業風景の写真も取り入れ、利用者の皆さんが取り組む様子や現場の雰囲気をもっと身近に感じてもらえる内容とした。温かみと見やすさを両立した仕上がりとなっている。

また、A4サイズに対応しているため、チラシとして配布することも可能だ。そのため、農福連携のPRはもちろん、法人自体の広告媒体としても活用できる点が大きな強みであり、現在、ポストカードサイズなどへのリサイズも検討しているところである。

設置場所はNEXCO東日本が管理する酒々井パーキングエリアで、売店内の利用者が立ち寄

りやすい場所に設置されている。高速道路を利用する方々の目にも留まりやすい環境にあり、多くの方に掲示物を見てもらうことで、私たちの活動や存在をより広く知ってもらうことも期待している。

掲示物の完成は、法人の認知向上や信頼の獲得、関係者への理解促進へと繋がり、今後の活動にも大きく役立つことだろう。 (根郷通所センター所長 菊地 暁生)

□ 今月は楽しみ盛沢山 (山王の家)

晴れた土曜日、待ちに待ったカラオケ&昼食会を開催した。これまで実施したことのない行事であったが、企画が決まった時から「何を歌おうか」「何を着て行こうか」と、利用者の皆さんは当日を楽しみにしていた。カラオケボックスでの滞在時間は3時間ほどであった。マイクを取り合うこともなく、他の人の歌を聴きながらタンバリンで応援するなど、和やかな雰囲気でも過ごした。

これまでは、外出時に受ける刺激の多さから行動の予測が難しい方について、集団での外出が困難な面があった。しかし今回は、根郷通所センターの外出企画に合わせて実施し、何かあった際には互いに協力できる体制を整えた。また、家族から事前に情報提供を受けられたこともあり、利用者4名と職員1名と一緒に外出を行い、安全に実施することができた。今後も柔軟な発想を取り入れながら、利用者の余暇活動の充実を図っていきたい。

(山王の家 岡本 綾子)

□ 医療的ケア児等コーディネーター連携会議 (かけはし)

今回、医療的ケア児等コーディネーター連携会議に参加し、佐倉市で実施している医療的ケア児等の避難訓練や啓発活動について発表を行った。当日、100名を超える参加者の前で発表となり、初めての経験で非常に緊張したが、佐倉市での取り組みを伝えることで、何かのきっかけを提供できたのであれば嬉しく思う。私自身もコーディネーター研修を受け活動を行っているが、難しさを感じることが多い。医療的ケア児者にとって災害に備えることは重要であり、命に関わる部分が大いだが、家族だけで備えることには限界がある。しかし、地域性や家族の思いの中には「資源が少なく、近くに頼れる住民がいない。地域の人には知られたくない」という声を聞くこともある。支援者の一人として、そのような思いを受け止め、どのような方法が良いのかを共に考えていく支援者・協力者でありたいと、今回の研修を通して改めて感じた。

(かけはし 齋藤 美佳)

□ グループホーム入居者率 (ワークショップかぶらぎ)

就労継続支援B型事業所に通う人のうち、グループホームに入居している人の割合は全国平均で35%程度といわれている (全国知的障害者福祉協会調べ)。ワークショップかぶらぎにおいて、開設当初はグループホーム入居者がいなかったと記憶している。しかし、令和8年2月現在、就労継続支援B型事業の利用登録者34名に対し、グループホーム入居者は7名である。その割合は20%にまで上昇している。

障害の程度や家族との関係、同居家族の高齢化などがグループホーム入居の理由となるが、入居したとしても人間関係の悩みから解放され、メンタルへの影響がなくなるわけではない。同じホームに暮らす他の利用者やスタッフとの関係性が、長年見守ってきた家族との関係のようにスムーズになるには、ある程度の時間を要するだろう。

日中の事業所である我々も、その影響下にある本人を支える上では、グループホームでの

状況を踏まえた支援が必要になる。多様な事業者が参入している業界であり、ホームの在り方や支援体制も様々である。ホームごとの個性性を見極めながら、協力体制を敷いていかなければならない。
(ワークショップかぶらぎ 宮部 和樹)

□ ～業務整理による支援の質向上～（宮前の家）

開所当初の混乱期を脱し、入居者の生活が安定してきている。生活支援員や世話人も、それぞれ周囲が見えてきた。今後は「誰もが迷わず、かつ誰もが同じ質の支援を提供できる仕組み」の構築が求められる。

支援基盤を構築するにあたり、生活支援員が「本来向き合うべき対人援助」に集中できる環境を整えるため、「無理・無駄・ムラ」を整理してマニュアルを見直したい。また、マニュアルは完成をゴールとするのではなく、現場の気づきを即座に反映できる運用を目指す。仕組みが整うことは、生活支援員や世話人の心に余裕を生み、それが巡り巡って入居者の生活の質（QOL）向上へと直結すると考えている。

【入居者担当制について】

宿直者へは、宿直業務のプラスアルファとして入居者担当制を導入する。これにより、一人ひとりの「小さな変化」に気づきやすくなると考えた。日中の通所先や共有スペースでの姿だけでなく、自室での過ごし方を知ることで、生活の質の向上に繋がれるよう取り組みを行っている。
(宮前の家 高橋 健)

□ それぞれの地域移行(アシスト)

2月13日に「地域移行」をテーマにした研修に参加した。施設入所、刑務所、精神病院、それぞれの地域移行の取り組みを聞くことができた。その中でも、施設入所者の地域移行に関する発表は非常に興味深いものであった。

富津市の取り組みでは、障害者総合支援法への移行に伴い施設入所者の定員見直しが必要となった際、市内2か所の入所施設と行政、基幹相談支援センターで協議が行われたという。地域体験ができる施設で入所者全員に対してトライアルを実施し、地域移行する利用者を選定したとのことだ。

発表者によると、「この人は地域へ行けるだろう」と予測していた利用者が思いのほか順応できず、トライアルを中止したケースもあれば、「この人は難しいだろう」と考えていた利用者が落ち着いて過ごせ、周囲を驚かせた例もあったという。「移行体験を通じて、入所者の新たな一面を知ることができた」という言葉が印象的であった。

地域移行に関しては全国的にも実績が少なく、精神障害者関係の集まりでは、地域移行を促進するための協議や研修が度々行われている。私自身も「時間がかかる」「余裕がない」と感じてしまい、ここ数年は地域移行への関わりが消極的になっていたように思う。今回の研修を受け、地域移行のメリットに目を向けつつ、利用者の新たな可能性を見出すための手段、そして一つの方向性として示していけるよう支援を行っていききたい。

(アシスト 小平 和俊)

□ 実習生受け入れ（はちす苑）

2月2日から3月3日までの期間、久しぶりに実習生の受け入れを行った。実習生には新型コロナウイルス感染症への対応のため、急遽フロアの変更をお願いすることとなった。そのような状況下でも、実習生は基本的な感染対策を徹底しながら、現

場でのケアに真摯に取り組んでいた。ご利用者の皆様も温かく受け入れてくださり、「頑張ってるね」「若い人が来ると元気が出るね」といった声が聞かれ、日常に少し明るさが戻る場面も見られた。

職員にとっても、実習生への説明や指導を行う中で、自身のケアを振り返る良い機会となった。何気なく行っている介助についても、その根拠や目的を言語化することで、基本に立ち返ることができた。また、チームで実習生を支える意識が生まれ、職員間の連携強化にもつながった。感染対応により業務負担は増加したが、互いに声を掛け合いながら協力し、ご利用者の生活を守る姿勢を共有できた。

3月も引き続き体調管理と感染対策を徹底しながら、ご利用者一人ひとりが安心して過ごせる環境づくりを継続していく。
(はちす苑課長 柵 直芳)

□ 出前講座開催！（佐倉市南部地域包括支援センター）

2月は3か所で地域の出前講座を行った。各出前講座の内容を紹介する。

① 根郷角栄すみれ会

11日（水）、根郷角栄団地の老人クラブである「すみれ会」から依頼を受け、「頭と身体の健康教室～フレイルを防いで、いつまでも元気に過ごそう～」をテーマに講座を行った。まずは脳トレを行ったのち、フレイルの要因や簡単にできるチェック方法、そしてフレイル予防には「運動」「栄養」「社会参加」が大切であることを伝えた。運動については自宅でできる簡単な体操も紹介し、実際にその場でおこなった。参加者は熱心に耳を傾け、今後もフレイル予防のために地域の活動に参加し、積極的に取り組んでいきたいと話していた。

② はつらつ会

16日（月）、弥富地区の体操会である「はつらつ会」から依頼を受け、「ふまねっと運動」を行った。ふまねっとは、50cm四方のマス目でできた大きな網を床に敷き、その網を踏まないようにゆっくり慎重に歩く運動である。頭でステップを学習しながら身体を動かすため、歩行機能の改善や注意力、記憶力、集中力の向上が期待できる。まずは基本ステップを練習した後、2月なので「豆まき」のステップを紹介した。

最初は皆「難しい」と難色を示していたが、お互いに「できてるよ！」「がんばって！」と声を掛け合いながらステップの練習を行った。職員が想定していたよりも早く皆ステップを覚え、最後には全員で「豆まき」を歌いながら、ステップを行うことができていた。包括職員もふまねっとインストラクター資格を所持しているため、今後も地域内で積極的に行っていきたい。

③ 春路会

28日（土）、春路の老人クラブから、毎年恒例となっている健康に関する講座の依頼を受け、今回は「血圧」について講座を行った。開始直後にまず、各々で血圧を測定し、その後脳トレやコグニサイズを実施した。脳トレは、細かい指の動きを左右別々に行うもの、コグニサイズでは3の倍数で手を叩きながら手足を動かす動作を行った。皆、楽しみながら実施することができていた。

血圧については「血管若返り大作戦！～血圧と上手に付き合うコツ～」というテーマで、高血圧の数値や予防方法、正しい測定方法について伝えた。開始直後に血圧を測定していたため、数値や測定方法について、自身で振り返る機会となった。参加者からは血圧についての実体験や質問などが多く飛び交い、血圧への関心の高さをより感じられる講座となった。

(佐倉市南部地域包括支援センター 森 由美子)

□ 猛威を振るったインフルエンザ（佐倉市南部児童センター）

・学校閉鎖中の児童館利用

市の条例や全国児童館ガイドラインを確認した結果、学校（学級）閉鎖時の児童館利用について、明確な表記はないことが分かった。これまでは感染症による学校（学級）閉鎖の場合、風邪の症状がなくても利用を控えるよう依頼してきた。当児童センターは小中学生の利用が多い施設である。学校閉鎖中に利用を許可すると、多くの児童が来館し、安全の確保が難しくなる可能性が高い。この点を市に相談し、これまで通りの対応を継続することの承諾を得た。

今年のインフルエンザは例年以上に猛威を振るい、近隣の小中学校では学校閉鎖になるほどであった。「A型とB型の両方にかかった」という話も多く聞かれた。このため、外出を控える家庭も多かったのだろう。今月の利用者数は今年度最低となった。子どもたちには体調を回復させ、来月にはまた元気に遊びに来てほしいと願う。

（佐倉市南部児童センター 吉田 知加子）

□ アンケート結果（佐倉市南部地域福祉センター）

2月21日（土）、「南部地域福祉センター定期利用団体との懇談会」を開催し、28団体の代表者に集まっていた。今回の定期利用団体懇談会では、各団体の自己紹介のほか、当センター職員より昨年秋から行った利用者アンケートの結果を公表した。当福祉センターの利用者120人からアンケート結果を回収でき、内容は20の質問で、センターの対応や身だしなみ、案内表示、センターの利用頻度などである。アンケート結果として、とりわけ大きなクレームは出されず、概ね良好な結果と思われるが、センター側からの情報発信の工夫が必要という課題も浮き彫りになった。具体的には、ホームページやセンターだよりなどの閲覧が非常に少ないことが判明したのである。逆に、情報の収集や発信は、人伝え（友人・知人）によることが多いと分かった。そのデータを活用するのであれば、やはり利用者との直接的なコミュニケーションによる情報伝達が大切である。

（佐倉市南部地域福祉センター 青山 秀人）